

# 大塚・歳勝土遺跡公園(横浜市)

さいかちど

これは横浜市歴史博物館の屋上から大塚・歳勝土遺跡の所在する小高い丘の上を見たところ





陸橋を渡ると説明坂がある





大塚・歳勝土遺跡公園/一つの大きな弥生時代集落と、それに付随する同時期の方形周溝墓の存在が明らかになった貴重な遺跡が所在する



大塚・歳勝土遺跡という呼び名は、弥生時代中期を中心とする大規模な環壕集落の大塚遺跡と、隣接する方形周溝墓群の歳勝土遺跡との総称





ここを登って進む





広い公園となっている





「大塚・歳勝土遺跡」と記された標柱が立っている



説明坂もある

## 国指定史跡 大塚・歳勝土遺跡

大塚・歳勝土遺跡は、今から約2,000年前（弥生時代中期）にこの地方で稲作を始めた人々のムラ（大塚）とその墓地（歳勝土）を中心とした遺跡です。

大塚遺跡では、まわりに大きな溝をめぐらせた外周600mにおよぶ大規模なムラ（環濠集落）の全体が発掘され、85軒の竪穴住居跡と10棟の高床倉庫跡などが発見されました。竪穴住居跡の重なり合いや分布の様子から、ムラは10軒前後の竪穴住居に1～2棟の高床倉庫をそなえた人々

の集団が、3つ集まってくらしていたと考えられます。ムラのまわりには幅4m、深さ2mほどの溝をめぐらし、外側に土を盛った土塁をもうけて守りを固めていました。

歳勝土遺跡では25基の方形周溝墓が確認されましたが、西側にまだ調査されていない部分があり、総数は30基前後と推定されます。

大塚・歳勝土遺跡はムラと墓が一体としてわかる貴重な遺跡として昭和61年に国の史跡に指定されました。



大塚遺跡



歳勝土遺跡



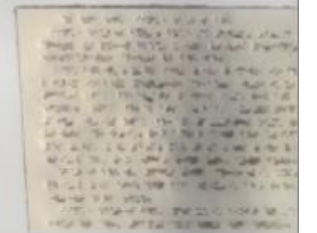
大塚・歳勝土遺跡出土遺物

（用語の解説）

環濠集落：まわりに溝をめぐらして守りを固めたムラで、弥生時代に九州から関東・北陸の各地で造られ、この時代大きな争いのあったことを物語るしています。

竪穴住居：地面を1mほど掘り下げ、その土をまわりに積みの上に屋根をかけた半地下式の家屋で、出入りに土を使っていたことが大塚遺跡の調査でわかりました。

方形周溝墓：まわりを四方の溝でかこみ低く土を盛った墓で、墓が生まれ拡大して行く弥生時代から古墳時代のムラの中の造られた人達が葬られました。





これは大塚・歳勝土遺跡周辺地形模型







子供の遊び場と化している





その左手に大塚遺跡が所在する





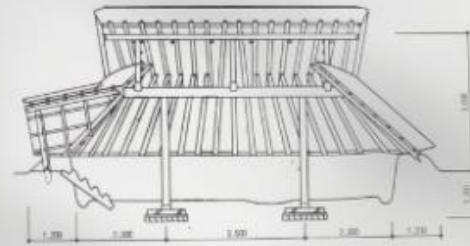
遺構の上に盛土をして再現している

# 大塚遺跡の保存整備

弥生時代中期の環濠集落を中心とした大塚遺跡は、港北ニュータウンの開発に伴う事前調査として、昭和48年から51年にかけて発掘調査が実施され、貴重な歴史的文化遺産として、その東側部分が保存されています。

保存整備は調査によって発見された弥生時代の遺跡を約1.5mほどの盛土によって保護し、集落として生活していた様子を再現するため遺構の直上に住居などを復元しました。

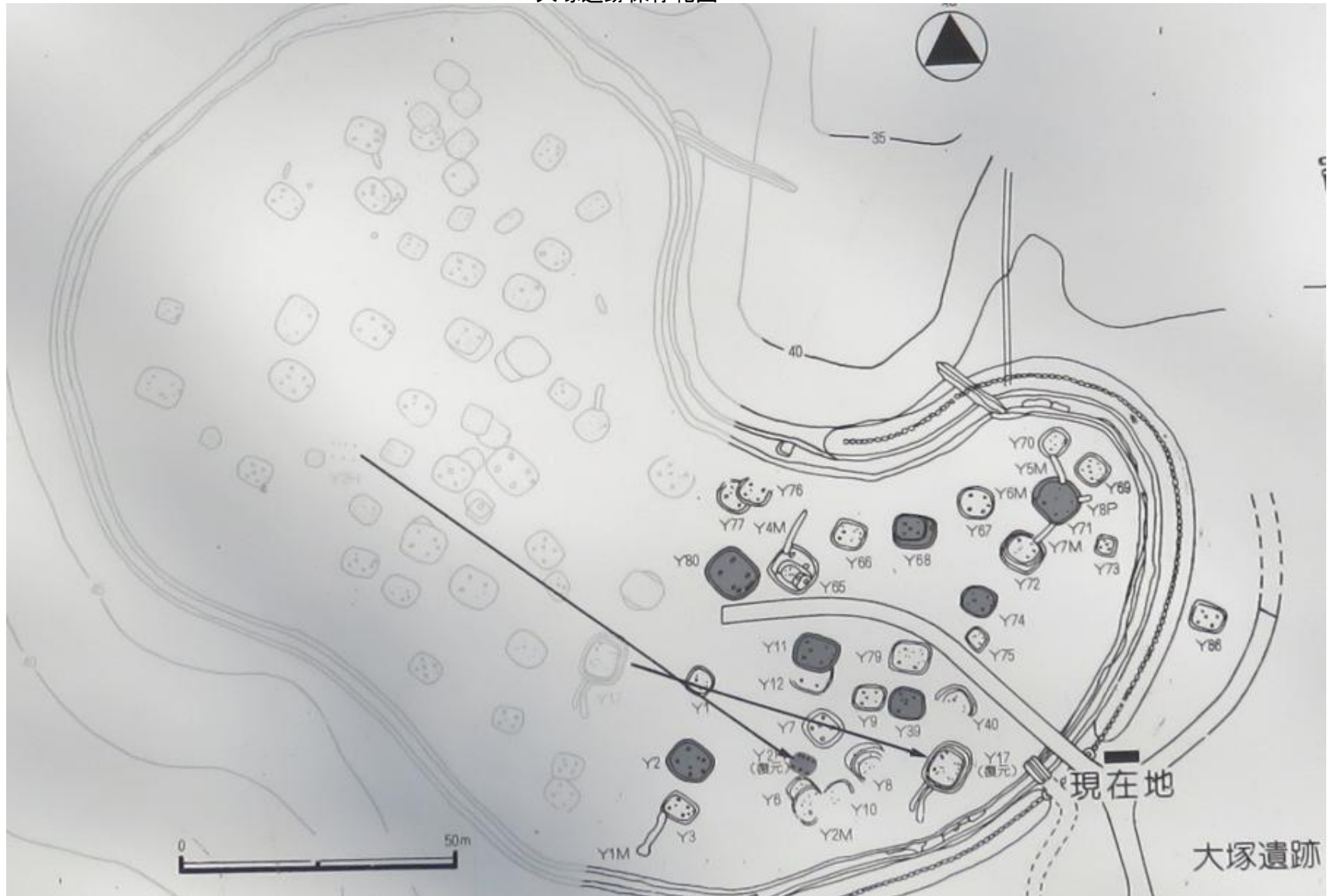
- (遺構の復元)**
  - 竪穴住居 (7棟)** 発掘調査によって明らかにされた、土築材料や構造などの基礎資料をもとに、弥生時代の「もうひとつの姿」を再現しました。構造：入山型造り。材質：主柱は樺、屋根は茅。
  - 高床倉庫 (竪立住居跡)** この遺物は、遺跡西側部にあつた倉庫と考えられる遺構を移動復元したものです。構造：高床。
  - 竪穴住居の発掘調査時の姿** 発掘調査によって発見された住居跡の構造・空間を観察できるよう、移動再生したものです。
  - 溝** 調査によって発見され、遺構の直上に復元し、その外側には防雨用の施設と考えられている土壁、堀を復元しました。
  - 木構** 調査を渡る木構を復元しました。材質：コナラ
  - 住居跡の表示** 復元されなかった竪穴住居の位置を示しました。



竪穴住居復元断面図



大塚遺跡保存範圍





このような環濠集落となっている [\(クリックしてビデオを見る\)](#)



# 環濠・土塁・柵

環濠は台地の縁にほぼ地形に沿って掘りめぐらされ、外周600mでムラを囲んでいます。水はけのよい赤土層（関東ローム層）に掘り込まれた空堀で、環濠内に外側から多量の赤土が流れ込んでいることから、掘った土を外側に積み上げて土塁をきずいていたことがわかりました。土塁の上には木の柵をもうけていたとみら

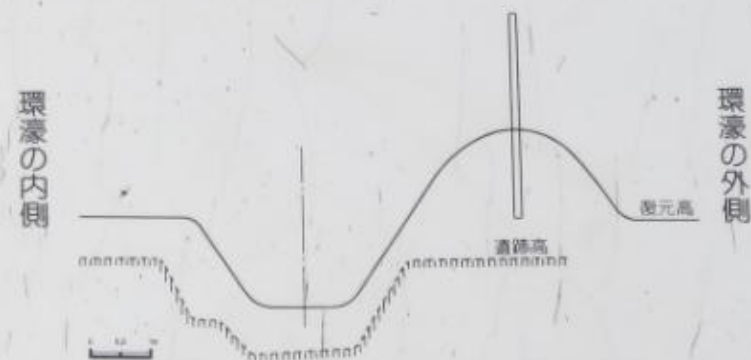
れます。環濠は1度うずまったあとに掘り直されており、北東側では谷を横断しています。竪穴住居の半数近くが火災にあっていることから、大きな争いのあったことがうかがわれ、環濠をめぐらせてムラを守らねばならなかったのでしょう。



大塚遺跡の環濠



大塚遺跡の環濠



大塚遺跡の環濠は、台地の縁に沿って掘りめぐらされ、外周600mでムラを囲んでいます。水はけのよい赤土層（関東ローム層）に掘り込まれた空堀で、環濠内に外側から多量の赤土が流れ込んでいることから、掘った土を外側に積み上げて土塁をきずいていたことがわかりました。土塁の上には木の柵をもうけていたとみられます。環濠は1度うずまったあとに掘り直されており、北東側では谷を横断しています。竪穴住居の半数近くが火災にあっていることから、大きな争いのあったことがうかがわれ、環濠をめぐらせてムラを守らねばならなかったのでしょう。



環濠・土塁・柵を見たところ





これは環濠に架かる再現木橋





説明坂がある



# 再現木橋

かんこう ほくせいたん  
環濠の北西端から見つかった、二対に  
なった4個の穴は、出入口にかけられた  
橋の跡だと考えられます。穴に柱を立て  
て枕木を乗せ、その上に丸太などの材木  
を渡して橋にしていたのでしょう。

一方、ムラの南東部には、さいかちどいせき  
の墓地に通じる出入口があったはずで  
す。しかしその付近からは、橋の跡は見  
つかりませんでした。南東部の橋は、再  
現した橋のように、数本の材木を渡す  
だけの、より簡単な作りのものでした  
と考えられます。





そこから振り返って見たところ/このような土橋ではなく木橋であったようだ



さて、これは発掘調査時のY-17号竪穴住居跡を再生(造形保存)したもので、当初の住居は2回拡張されている





# 竪穴住居跡の発掘調査時の姿

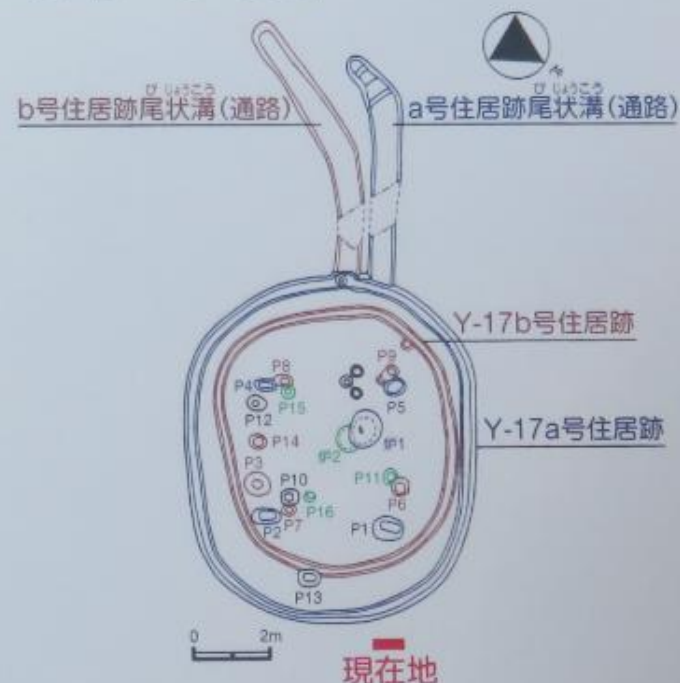
この保存された竪穴住居跡は、発掘調査時の住居跡の構造や空間を体験できるように再生したものです。

竪穴住居跡は、大塚遺跡のほぼ中央部で発見されたY-17号住居跡で、2回の建て替えが行われています。壁の一方には通路と考えられている溝がつけられています。

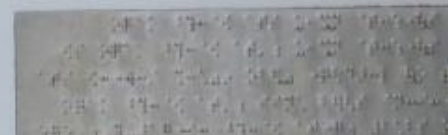
再生は、造形保存という方法で、発掘調査時に発見された住居跡の形や質、色合いを正確に保存するものです。

その方法は、次の順序で行われました。

- ① 関東ローム層を掘り込んでつけられている住居跡に、合成ゴムと石コウを使用して、表面の型を取ります。
- ② 型や発掘調査データを利用して、特殊加工をしたガラス繊維強化樹脂セメント（GRC）で住居跡の遺構面を再生します。
- ③ 再生した表面には色の調整モルタル、保護樹脂の塗布を行い完成しました。



Y-17a号住居跡（拡張2回目の住居）  
 主柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub> 炉1 出入口柱穴P<sub>13</sub>  
 Y-17b号住居跡（拡張1回目の住居）  
 主柱穴P<sub>6</sub>～<sub>9</sub> 炉1 出入口柱穴P<sub>14</sub> 貯蔵穴P<sub>3</sub>  
 Y-17c号住居跡（当初の住居）  
 主柱穴P<sub>11</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>16</sub> 炉2



こな塩梅





別の角度から見たところ/a号、b号それぞれの住居跡尾状溝(通路)が見て取れる



これは復元高床倉庫



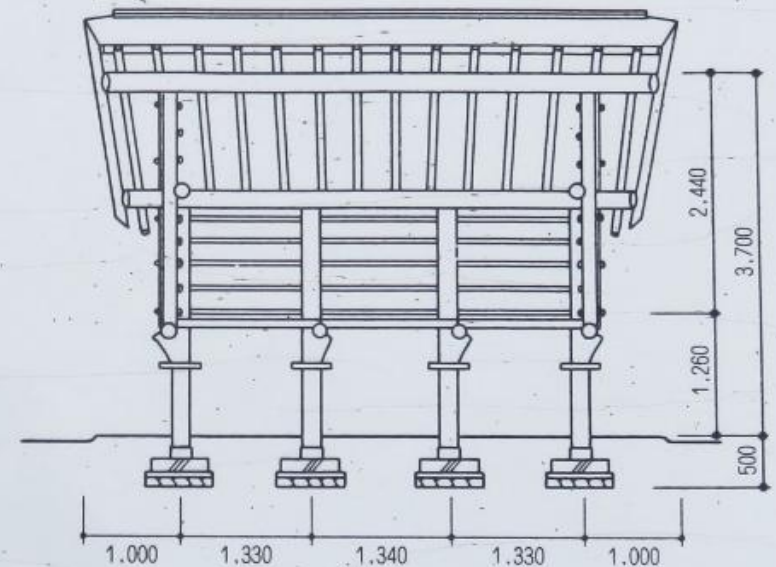


# 復元高床倉庫

遺跡からは、住居跡とともに掘立柱建物跡が発見されました。これは収穫した稲などを収めておく高床倉庫の跡だと考えられています。

穀物を湿気から守るために床を高くし、出入りには梯子を使ったことが銅鐸にも描かれています。梯子は厚板や丸木に足掛けを刻んだ一本梯子で、これは竪穴住居の出入り口にも使われています。柱には、ネズミの侵入を防ぐための「ネズミ返し」が取り付けられています。

大塚のムラでは、高床倉庫が一箇所に集まることなく、3つに分かれた住居群のそれぞれに分散しており、数件の住居群が1～2棟の倉庫を共有していました。



復元断面図 (Y-2H)

大塚のムラでは、高床倉庫が一箇所に集まることなく、3つに分かれた住居群のそれぞれに分散しており、数件の住居群が1～2棟の倉庫を共有していました。

別の角度から





復元中型住居



# Y-39号住居

中型住居。大塚のムラおおつかの標準ひょうじゆん  
的な大きさの住居です。  
てき



遺構写真





別の角度から





復元大型住居





# Y-2号住居

小型のたて あな じゆう きよ竪穴住居を掘り広げて、  
大型住居に建て替えたものです。



遺構写真

内部の様子





別の角度から





修理中のものもあった





このように幾つもの復元住居が建っていた



さて、正面が大塚遺跡の東側に所在する歳勝土遺跡 [\(クリックしてビデオを見る\)](#)





遺構の上に盛土をして再現している

# 歳勝土遺跡の保存整備

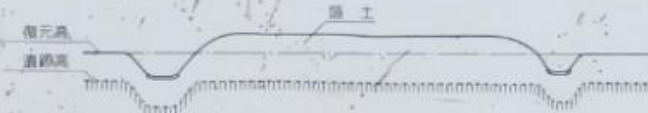
歳勝土遺跡からは、昭和47年度の発掘調査によって多数の方形周溝墓が発見され、出土した土器などから大塚遺跡で生活していた人々の共同墓地であることが明らかとなりました。

保存整備は、遺跡の全体を大塚遺跡と同じように約1.5mの厚さの盛土によって保護しています。復元は、

当時の墓の大きさや構造・配列などの様子が理解できるように、発見された方形周溝墓のうち遺跡の北西部に分布する5基の方形周溝墓（S-1・4・10・16・17号）を対象に、それらの遺構の直上に3種類の方法によって行い、あわせて、大塚のムラから歳勝土の墓地までの「道」を表示しました。



歳勝土遺跡



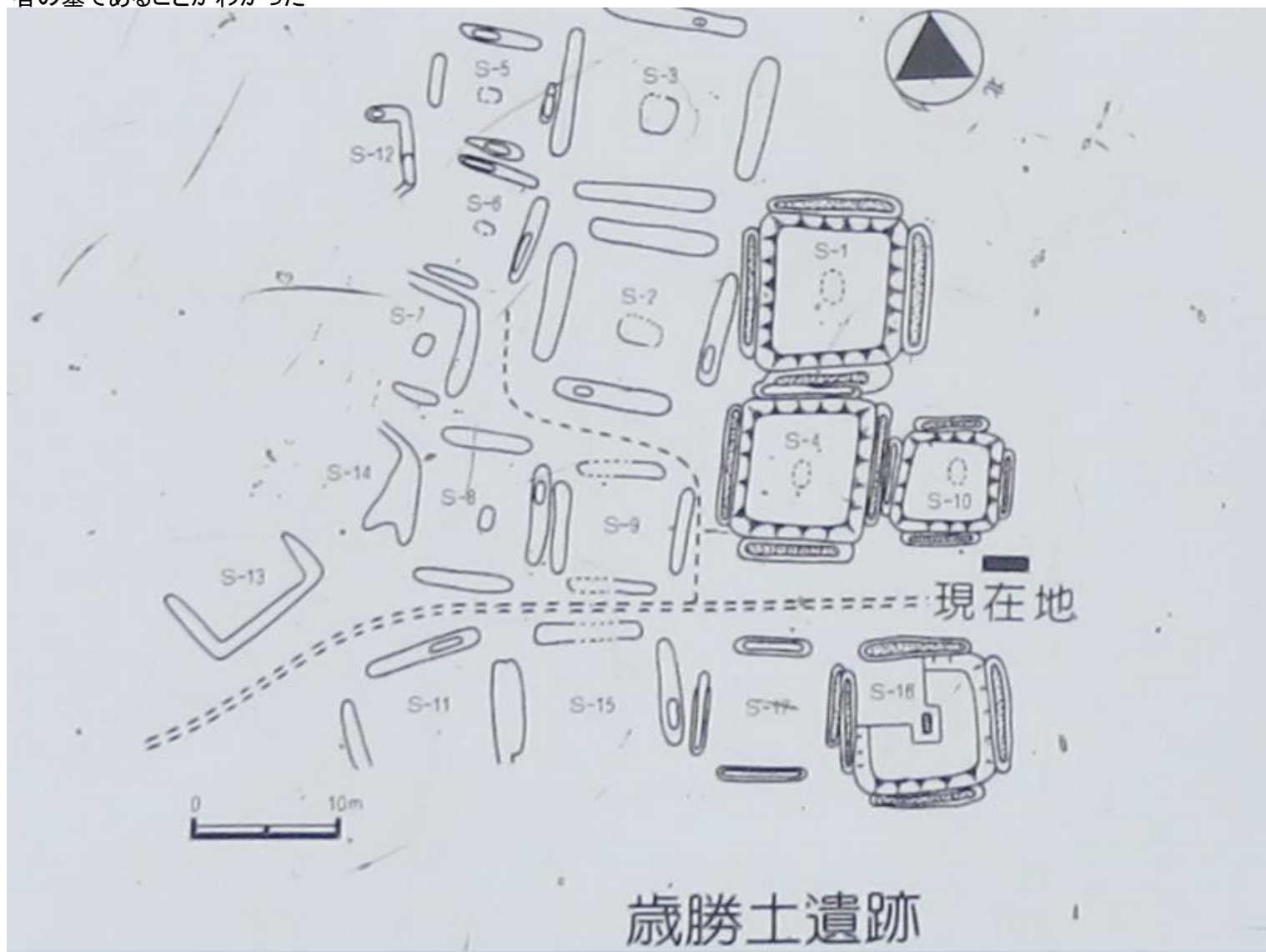
方形周溝墓断面図

## 〈方形周溝墓の復元〉

- 発掘調査によって出土した姿(S-17号)
- 埋葬当時の姿(S-1・4・10号)
- 埋葬内部の姿(S-16号)
- 周溝墓の表示(復元されなかった周溝墓の位置を示しました。)



周溝墓内から出土した土器などの遺物によって、大塚遺跡と同時代のものであることが確認され、歳勝土遺跡は大塚遺跡の居住者の墓であることがわかった





# ほ 墓 道 どう

おお つか さい かし ど ほ ち  
大塚のムラと歳勝土の墓地を結  
ぶ道



正面は方形周溝墓の埋葬当時を復元したもの/盛土状になっている





# 方形周溝墓の埋葬当時を復元した姿

方形周溝墓からは、多くの場合、四辺を囲む溝と中央の棺を埋めた穴だけが見つかります。ただし、洪水で一気に地中深く埋もれた方形周溝墓などでは、溝で囲まれた部分に低い壇のような盛り土が残っていることがあります。

歳勝土遺跡から見つかった方形周溝墓には、このような盛り土は残っていませんでした。しかし、これは盛り土が長い間に崩れたり、耕作によって削られたりしたため、本来は溝を掘った土などを積んだ盛り土があったものと考えられます。

埋葬は、主に盛り土の中央に行われましたが、溝の中から子供用と思われる土器の棺や、大きなくぼみが見つかることがあり、溝の中にも埋葬が行われていたことが考えられます。

復元された方形周溝墓配置図



この図は、方形周溝墓の復元された配置を示しています。S-1は主墓、S-4は中央の埋葬穴、S-10は土器の棺（壺棺）の位置を示しています。S-17とS-16は他の埋葬穴の位置を示しています。スケールは0から30cmです。現在地は赤い線で示されています。

正面の窪みは方形周溝墓の埋葬内部を復元したもの







これが復元木棺



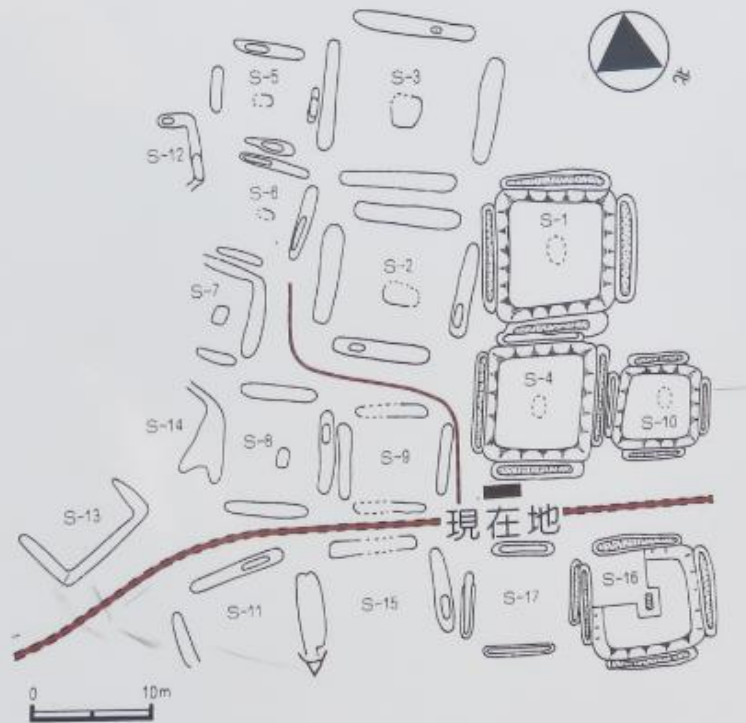


この道は墓道(墓地の中の通路)



# ぼ 墓 道

おおつか さいかち ど  
大塚のムラと歳勝土の墓地とは  
約80mはなれ、この間にムラから  
墓地への道があったと思われます。  
また、せつ せいぜん なら  
接し合うように整然と並ん  
だ方形周溝墓の列の間に一定の隙  
間があり、これが墓地の中の通路  
であったと考えられます。こふん  
古墳に  
はにわ そうれつ  
並べられた埴輪には葬列をあらわ  
したものがあり、大塚のムラでも  
な  
亡くなった人を歳勝土の墓地へ送  
っていったのでしょ。う。



歳勝土遺跡内の墓道



四辺を囲む溝を掘った土を中央付近に盛土し、四角い穴の中に棺を納めるという墓



# 方形周溝墓の発掘調査によって出土した姿



威勝土遺跡発掘調査の様子



こちらは復元せずに、置き石によってその範囲を表示したもの



# 方形周溝墓の表示

復元されなかった方形周溝墓は、  
石によって位置を示しました。





参考ホームページ

[http://www.gregorius.jp/photogallery/page\\_44.html](http://www.gregorius.jp/photogallery/page_44.html)

[http://inoues.net/ruins/ootuka\\_saikatido.html](http://inoues.net/ruins/ootuka_saikatido.html)

<http://www.adnet.jp/nikkei/shiseki/contents/093.html>

